

わたしの
心のレンズ
現場の記憶を紡ぐ

大石芳野

Oishi Yoshino

写真

大石芳野

まえがき

長年にわたって私はドキュメンタリー写真を撮ってきた。人様に会って話を聞いてカメラで記録することがその手法であり業である。^{なりわい}ところが今の私にとって致命的とも思える事態に追い込まれている。新型コロナウイルス（COVID-19）禍では飛沫が感染源になるとの専門家たちの説明で、対面する撮影はなかなか厳しい状態に陥ってしまった。自然や公園、街角などの撮影は可能だからこの際、私のスタイルを切り替えようかと思わなくなかったが、その世界も広くて深いから簡単なことではない。“To be, or not to be”というハムレットではないけれど、この状況に甘んじて自ら周りの変化に合わせて生きるのか、いえ、自分自身を貫いて自分の信念に従って生きるのか……。まさにハムレットの苦悩をわが身に衝きつけるといった心境だ。舞台で演ずる俳優や音楽家たちと同様に私の講演会なども次々にキャンセルになり、予定は「延期」から「中止」へと移行し、まるで「失業状態」になった。こうした事態に遭うのは初体験だからと失笑しつつも、実際は辛い。ピンチをチャンスに変えるしかないのだから

と、思考停止ではなく思案するために立ち止まる。もしかして、私にとって今がそのときなのかもしれない。「Not stop thinking, but stop to think」と私の友人が口癖のように呟く言葉のように。

半世紀近く、内外の取材活動でかなり身体は疲れてきていたので休憩するにはグッド・タイミングだとも思った。そこで本棚から子どもの頃や若い頃に読んだ本を引っ張り出しては懐かしく読みふけた。あの頃の読後感とはズレもあり、本当に読んでいたのだろうかと自分を疑うこともままあるほどだった。それでもどの本も懐かしく、独り^{ひと}軽いメランコリックな気分になり、一冊読むと、関連した本を次々と読みたくなるのが私の性癖^{くせ}で、書棚を搜索し、古書を調べ……充実した「沢山の時間」を楽しんだ。青春時代が再びやって来たような気分浸った。さらに、テレビで再放送される映画やドキュメンタリー番組、海外のニュースもかなり見る時間が持てた。

コロナ禍に苦しんでいる人たちが多いときに不謹慎だと思いつつも、わが人生を反芻するなども含めてゆったりとしたわがままな日々を過ごした。「思春期の闇」では下手ながら思うに任せてたくさんの詩を書いた。今また書かざるを得ない心境になったが、今度はあの若い頃とは異なるもやもやした自分の気持ちや過ぎし日々を振り返るには詩ではなく文章で表現してみようと思った。夜明けに向かって歩いて行きたいがために。

思春期の頃、誰もが陥る人生の暗闇。なぜ自分はこの世に生まれたのか、何のために生きなければいけないのかといった思いにとらわれた人は多いだろうが、私もこの闇の深みにはまり込んだ。病人かと思ひ惑う歳月に見舞われ、家族もクラスメイトも教師も社会も他人はみな私から遠い所に行ってしまったような気持ちになって沈んでいた。孤独、孤立感、不安……独りひたすら高く分厚い壁の前に佇んで見えない魔物と格闘しているような状態が数年も続いた。あの頃のことを思うと、ある意味で懐かしくもある一方、胸苦しさを覚えてしまう。

そして二〇二〇年の初頭から、青春の悩み深かったあの当時とは違った心理状態に追い込まれている。それでいてどこか似ている現在の社会状況に戸惑いを感じるようになった。社会を覆い始めた恐怖に近い空気が徐々に強まり、新型コロナウイルスによるパンデミック社会に一変してしまった。やがて状況はどんどん悪化していき、その流れはじわじわと私にも押し寄せてきた。そして病気ではないのに、まるで病人のような気分になった。これはいったいなんなのだろうか……。『コロナ』という目に見えない恐怖や不安が引き起こす心身の不調に違いない。

あの思春期の頃、生とは何か？ 死とは？ なぜ生きようとしているのか？ 夜道の路地は人通りも少なくて怖いし、また、突進してくる車や電車を避けようと必死になるなどと、生に

しがみつく私の内なる意識がたまらなく嫌だった。いたいこの感情はどこから湧いてくるのか……。自己嫌悪の日々だった。生きる本能なのだろうが、それにしても無意識に私を支配している生の意識に取り憑かれていた自分とは何者なのか……。若い私は深く暗い底の見えない泥沼のなかにはまり込んだように身動きが取れなくなり、体調も悪化していった。

そんなあの頃を思い出しながら先の見えない今の気分の原因は何なのか。「コロナ」のせいではないかと、まるで冗談のような思いに至った。ウイルスに感染はしていなくても「コロナに感染する」を否定し切れない不安定な精神のありようかもしれない。気を付けながらも、必要以上には人の群れを避けて、友人と懇談もし、そして神経質にはなっていないと思う。

若い頃よりも経験も体験も積み重ねてきたのだから、暗闇に溺れることはもうあり得ないと自分をかばってはみる。これがあの時期の「人間の実在」をめぐる思索だったのだろうと後で悟り、人生の通過儀礼だったのかもしれないと今では思っている。けれど、それにもかかわらず最近のこの不安感は何なのか？ 真の意味で自律的に生き、自己決定し、責任をもって生きてきたと自負しているのに。

若い頃の悩みのひとつが「無意識の自己」についてだった。写真の道に進んだ理由にその追求もあったのか……と後付けのように考えもするが、アート写真ではなく私はドキュメンタリ

「写真の分野だから無意識の意識については模索しにくい。けれど今になってみると、長年、現場に足を運び戦禍や大災害に見舞われた人びとと直接に向き合つて話を聞き、写真を撮ってきたことで、多くを教えられ考えさせられてきた。現地の人たちが直面する喜怒哀楽に触れる度にその真なる姿は何なのだろうか、そしてそれが私の写真で伝わるだろうか……」いつも氣になった。写真と言っても幅が広いけれど私はカメラを心の眼として、人びとの内なる根っこに潜む心情を表現したいという考えが次第に深まって今に至っている。時に、写真には意識した姿ばかりか無意識の私までもが表れる。取材相手と私の共同作業であり相互作用の結果として写真が生まれることが多いからかもしれない。

取材相手の無意識に漂う心の内側を何とか一枚の写真に収めたかった。とりわけ戦禍に苦しむ人たちの撮影には思春期に悩んだ私自身の無意識というものを相手の心のなかに見つけようとしていたから、若かりし頃の悩み（生と死という人間存在の根源的な追求）も、少しは写真表現に生かされて役立ったかもしれない。時には自分を慰めてもみる。現場で向かい合つてゐるその人の心の奥に潜む戦争をどう写真に込めたらよいのか。その人たちの語る言葉のなかに沈殿する苦悩を、時には安堵や喜びを写真に写し取りたいと願い、本人の無意識の意識にこだわりながら何とか引き出そうとしてきた。

同時に、その営みは私の心の奥も自らの手によって引き出すことにもなる。写真は残酷なほ

ど自分のまやかしまでもが写り込んで心を投影してしまうため、自分の撮った写真にどれほど自分を情けなく思ったことか。

出会った人たち一人ひとりの表情やその地の状況などをあれこれ思い描いては、今や夢想の対話を楽しんでいる。出会ってから何年も経つのに、あの当時のままのあの人たちだ。どうしているかな……元気でいるだろうか。世界中がパンデミック状態だから残念ながらその人たちに会いに出かけることは制限される。

半面、自分を反芻しながら青春時代に否応なく引き戻される心境が続くなかで、記憶に色濃く残る人たちと書棚の本とが細いひもで繋がっていった。子どもの頃や若い頃に巡り合った心に触れる本の主人公たちに、私が出会った人たちが思いがけずに、結びついた。あのまま、現場から現場を走り回っていたら、今感じているこの私の考えを整理することはできなかっただろうし、こうして文章にすることにも思い至らなかったかもしれない。「失業したように」内外の取材活動を厳しく制限されたコロナ禍の状況によって、久々に自分との奥深い対話が可能になった。

新型コロナで苦しんでいる人たちはイコール自分であることも確かだ。いくらワクチンや特效薬が開発されて流通しても、日本ばかりか世界中の大勢のすでに失われた命は戻ってこない。

遺族は対面も許されないうえ、身体を清めることも撫でることも禁止されて故人と別れなければならなかった。どれほど辛かったことか。もし、自分だったら泣いても泣ききれないだろう。そうした理不尽な永遠の別れを新型コロナ、あるいは社会は強いた。ここに「コロナ禍」の不可解さや不条理が潜んでいる。

COVID-19とその変異株自体なのか、あるいはそれを取り巻く社会や経済の状況や思惑なのか、さまざまな憶測がうごめいて、とうてい私の理解を超えてしまう。もしかしたら、何らかの勢力が混乱を狙って仕組んだとも言われている……それすらもわからない。苦境に置かれたその人たちを忌避し差別する人が後を絶たない。自分もいつ襲われるか（感染するか）他人事ではないのに、非常識だ。「コロナ」自体よりもそれによる人びとの態度や心理の方が恐いと言われる所以だろう。戦いの相手は「飛沫が原因になるウイルス」なのである。感染した人はだれも雇いたくはなかった被害者でもあるのに、なんと浅はかなのだろう。こうした偏見はいつたい、何から来るのか。

ある日、マスクを忘れたのか？ 代わりに厚手のマフラーで口元を覆ってうつむいて静かに立っていた女性が狭いエレベーターに乗ってきた。すると、居合わせた男性が彼のマスクの間から飛沫が飛び散っているかのような大声で「この事態にマスクをしないとは何事か！」と罵声を彼女に浴びせながら、殴り掛からんばかりだった。彼はまるでマスクの呪文にかかって

いるような感じさえた。全身から恐怖が滲み出ている。彼のその姿を目にしながら、差別はこうした偏狭な歪んだ気持ちや無知、我欲などから始まるのではないかと思った。

今や、ウイルスはさまざまに変異する途にある。この先、コロナウイルスはどんな変異を遂げながら、この社会にいかなる禍を振り撒いていくのか。人類が誕生するずっと以前、おそらく生き物が地球に現れた三億年前よりもっと古くから、ウイルスは存在していたのだろう。人間ばかりでなく生き物のほとんどがウイルスと闘いながら、あるいはウイルスに助けられ保護されたりもしながら、共存し今日を迎えている。私たち人間の祖先もさまざまな闘いを勝ち得た者だけが「人類」として生き残り、現在に至っているのかもしれない。それだけに「コロナ禍」をきっかけに人間としての尊厳を傷つけることがより多くなった今日、「コロナ禍」は人間のこれまでの歩み、ひいては「近代化とは？」という問いをも露骨に衝きつけているようにも思える。

私たちが夜明けに向かって歩き続けられるのは犠牲者を心底から悼みつつ沈着な判断と真摯な思いの深さを抱き続けてこそ、だ。他人を思いやる心、他人の痛みを分かち合う優しさ。そうした心を培う想像力……。そしてささやかでもひとのために自分にできることを実行するといった行動力があってこそ、その先に光が見えるのだろう。昔も今も私たちはみな、森羅万象のなかで生きているのだという自覚が一人ひとりに問われているのではないだろうか。



コソボ

目次

まえがき

第一章 歪んだ日常

コロナ禍に思う

差別と意識と無意識

三人の少年

15

第二章 戦禍と不条理から

戦禍と不条理から

ベトナム① 子どもたちの戦争『ツバメ飛ぶ』

ベトナム② ベトナム戦争の魔の監獄・コンソン島

音楽の力① ゲットー（ユダヤ人強制収容所）

61

3

音楽の力② 戦場のピアノリストを助けたドイツ軍将校
カンボジアへ心に潜む魔性

第三章 戦争の終わりとは何か

被爆者の同心円へ秋月辰一郎医師と被爆者
進化する被爆者治療へ被爆医師と被爆者
焼き場に立つ少年へジョー・オダネルが撮った長崎の少年の写真
沖縄① 「囚われの人」画家・儀間比呂志と阿波根昌鴻『命こそ宝』
沖縄② 高校生の詩「みるく世がやゆら」

第四章 本当の共生と共存について

ニューギニア① 精霊と共に森で暮らす高地民
ニューギニア② メラネシアン・アートの人びと

あとがき 戦場ウクライナ考

わたしの心のレンズ 現場の記憶を紡ぐ
大石芳野・著

発 行：集英社インターナショナル（発売：集英社）
定 価：990 円 (10%税込)
発売日：2022 年 6 月 7 日
I S B N：978-4-7976-8101-7

ネット書店でのご予約・ご注文は [こちらにどうぞ！](#)